

日蓮宗における七面山信仰伝播の考察 —熊本県荒尾市樺七面山妙巖寺成立過程—

伊東 愛恵

(手塚ゼミ)

目次

- はじめに
- 1章 七面山信仰と七面大明神
- 1節 七面山信仰について
- 2節 日蓮宗における七面山信仰
- 3節 七面山信仰における七面大明神の考察
- 2章 七面山信仰の伝播
- 1節 信仰の伝播の方法について
—うつし霊場—
- 2節 七面大明神伝播に影響を及ぼしたもの
- 3章 熊本県荒尾市七面山妙巖寺における七面山
信仰伝播の考察
- 1節 七面山妙巖寺の起こり
- 2節 荒牧藤助が七面大明神を勧請した理由の
考察
- 3節 日蓮宗及び七面山信仰の荒尾市樺地区へ
の伝播考察
- 4節 妙巖寺のうつし霊場考察
- おわりに

はじめに

私の実家は熊本県荒尾市にある日蓮宗の寺院で、名前は七面山妙巖寺（以下、妙巖寺）という。妙巖寺には日蓮を祀る祖師堂の他に七面堂があり、そこで七面大明神という神様を祀っている。七面山というのは山梨県南巨摩郡身延町にある日蓮宗の総本山身延山久遠寺の奥の院にあたる信仰の山である。妙巖寺の山号には七面山とあるが、その名はここからきているようだ。妙巖寺の裏には小岱山という501メートルの低い山がある。小岱山は以前、七面山と呼ばれていたこともあったという。私は、小岱山が本家の七面山に見立てられたためにそう呼ばれていたのではないかと考えた。全国に七面大明神を祀る日蓮宗寺院は多く存在し

ているが、山号に七面山と入っているのはとてもめずらしいという。七面山信仰を研究したものはいくつかあるが、妙巖寺のような地方の小さな寺院がクローズアップされたものはない。私はこのような信仰が地方の小さな寺院にまで伝播していることに興味を持ち、本山のある山梨県から妙巖寺のある九州熊本へどのような経緯で七面山信仰が広がったのかをふまえた上で、また日蓮宗唯一の山岳信仰である七面山の本質を明らかにした上で、創建の経緯が詳らかではない妙巖寺の成立過程を明らかにしたいと考えた。

妙巖寺には七面大明神に関する伝承もあるのだが、現在では知っている檀家さんや地域の方もほとんどいなくなってしまった。妙巖寺にもまた、歴史的な資料や文献は残っておらず考察も行われていない。そして、日蓮宗や七面山信仰に限らず、現代の人々は先祖代々受け継いできた信仰するという行為をやめてしまっているのが現状である。

妙巖寺が日蓮宗寺院となったのは明治からであるが、妙巖寺の七面堂でお祀りされている七面大明神の尊像がやってきて今年で300年の節目を迎える。それはいわば、七面大明神がこの地区の人々に信仰され続けて300年ということである。こんなにも歴史があるにも関わらず何もわからないままだというのは非常にもったいないことである。300年の節目にこの論文を完成させ見てもらうことで、現在の檀家さんや信者さん、地域の人々にも伝承や歴史を知ってほしいと考えている。そして、もう一度信仰というもののあり方を少しでも考えていただけると幸いです。

1章 七面山信仰と七面大明神

1節 七面山信仰について

この研究の軸となる日蓮宗とは、鎌倉時代中期に日蓮によって開かれた仏教の宗旨の一つで、法

華宗とも称する。日蓮宗は法華経を根本經典とし、「南無妙法蓮華経」という題目をとなえること（唱題）を重視している。

七面山信仰の七面山とは、山梨県南巨摩郡早川町にある標高1982メートルの山嶺で、南アルプス連邦に属している。山頂付近は身延町の飛び地となっている。この七面山という呼び名になったのには諸説有る。山頂に近い平坦地には身延山久遠寺に属する敬慎院（写真1）があり、登拝する信者達で賑わっている。⁽¹⁾ この敬慎院には、七面大明神が祀られている。身延山久遠寺とは、七面山の東に位置する身延山にある日蓮宗の総本山の寺院である。七面山は古来から民間の人々に信仰されており、伝承が数多く残されている。また、身延山の鬼門除けの位置にあることから末法の鎮守として信仰される。



写真1 七面山敬慎院

七面山信仰とは現在までに七面山において信仰されているものの総称である。七面山信仰は日蓮入山以前の古来から続くものと、日蓮入山後に語られるようになった七面大明神に関するものに分けることができる。

七面山信仰に関する多くの伝承を大きく四つのベースにしほると、それぞれ、①池大神の伝承、②七つ池の伝承、③七面大明神の伝承、④安芸国厳島女の伝承となる。まずこの節では、日蓮入山以前の古来から語られているという①、②の伝承を見ていく。

①池大神の伝説

往古、山麓の雨畑村の獵師が、山奥に入り、形の変った古木（或いは金の玉）を見つけ、仏像

に似ているので持ち帰った。それから一家中の者が急に病気になった。先日持ち帰った仏像に似た古木の祟りではないかと恐しく、近隣の信仰篤い人に委細を話し、預かってもらうことにした。すると此の信仰篤い人に夢のお告げがあり、神々しい人が現れて「自分は俗家にあることを喜ばない。九月十九日を期してあの山の頂きにある池の傍に祭るよう」と告げた。これは神のお告げであるというので、村人と共に、そのお告げに従って、池の畔に小祠を営んで、年々九月十九日に祭礼を



地図① 七面山周辺地図



写真2 一ノ池



写真3 池大神宮

催し、池大神と称して、崇拜するようになった。(望月敏厚編『近代日本の法華仏教 法華経研究Ⅱ』)⁽²⁾

伝承にもあるように、日蓮宗の影響が入る前から七面山についての信仰が語られているのは、赤沢地区、雨畑地区をはじめとする七面山のふもとの地域である。(地図①) 現在は七面山の一の池(写真2)の畔、七面大明神を祀る敬慎院の隣に池大神宮(写真3)があり、そこで池大臣の像を祀っている。そのため伝承に登場する池も一ノ池と考えられる。ここで祀られている像は、伝承に出てくる古木(或いは金の玉)ではなく、髪を高い位置で特殊な形式に結び、三角形の顎鬚をはやし、右手に自然木の長い杖を持った仙人風の老人の像である。老人であるということと、この特殊な髪の結び方は山伏に見られることがあるため、この像は日本の修験道の開祖役小角なのではないかとされている。⁽³⁾

②七つ池の伝説

山の上に七つの池があるという言い伝えがあったが、誰もその第七番目の池を見たものはいなかった。ある時、麓の樵夫が山にわけ入り、道に迷い何日間かさまよい歩き、疲れ果てて眠ってしまった。ふと醒めると池の畔にいた。池の方を見ると、池の中央が、にわかに波立ち、白雲がまき起り、靈竜が天に向かって昇って行く。此の恐ろしい有様に驚いた樵夫は、大事な斧も打ち忘れて、村に逃げ帰った。村人たちに話すと、それは、第七番目の池に違いないということになった。樵夫の忘れた斧は今も池の畔にあるだろうと伝えている。(望月敏厚編『近代日本の法華仏教 法華経研究Ⅱ』)⁽⁴⁾

この伝承に登場した七つ池には、①の伝承で登場した一ノ池(写真2)も含まれている。一の池は古来から一度も枯れたことがなく、さらに竜神が姿を現すといい、池そのものも信仰の対象となっている。そして、二ノ池(写真4)も現在の七面山中に存在する。二ノ池の畔には法華経に登場する八大竜王が祀られている。(写真5) 残りの五つの池の場所は現在もわかっていない。特に②の伝承に登場した七つめの池は「見ると目がつぶれる」という言い伝えがあるという。



写真4 二ノ池



写真5 八大竜王碑

身延山および七面山の一帯は、南アルプスの山容と富士川の早瀬によって、外界との簡便な交流をはばまれてきた。しかし、近くの寺平、大久保、清水丸山、桜井地区などから土器や石器が出土しており、5000年前にはすでに集落が営まれていたことがわかるという。⁽⁵⁾

七面山信仰の基盤の一つは山岳信仰にあると考えることができる。山岳信仰は、広く世界的に原始信仰として語られ、特に山岳地帯の多い日本の風土では全国いたるところに見られる現象である。山の頂は、天ツカミの天降る処として恐れられ、

崇拜されてきた。①、②の伝説にもそれらがよく表れており、恐るべき山・不思議な霊山として麓の人々に受け取られていたことがわかる。そして、川の源や池、湖などを有する山は麓に住む人々の水源となり、次第に信仰の対象となっていくと考えられる。七面山で言うと、水を枯らすことない一ノ池が集落の人々にとって信仰の対象になり、そこから池大神の水神信仰に発展したのではないかと考えられる。一ノ池には私も実際に訪れたが、必死に高山を登った後にあの景色を見ると、鳥肌が立つような神聖さを感じた。七面山の山容は、山岳信仰の対象となるにふさわしかったと言えよう。⁽⁶⁾

日本神話において水や川を通して現れるカミは一般に竜や蛇であることが多い。⁽⁷⁾ ②の伝承に見られる「霊竜が天に向かって昇って行く」という表現は、これの典型だと考えることが出来る。七面山信仰以外にも、先ほどのような表現は数多くみられる。これから考えると、日本には古来水の神の棲むと信ぜられていた池や淵がいかに多かったかが明らかである。⁽⁸⁾

そして、七面山麓の赤沢地区にある妙福寺は、もとは真言宗のお寺で、七面山を行場とする修験者たちの拠点であったという。そして、身延山と七面山を結ぶ道中にある妙石坊、十万部寺、神力坊などにまつられている「妙法大善神」は、「太郎ガ峰」「次郎ガ峰」の天狗であったという。現在の奈良県にある修験道の山吉野大峰山にも七面山と名付ける山があり、かつて回峰修行のコースであったという。七面山にとって重要な問題は①の伝承にある池大神として祀られている尊像は役小角か、少くとも後世それを神仙思想によって修正したものであろうと推定されることである。山麓の神力坊、十万部寺、妙石坊等に祀られている「妙法大善神」はもともと天狗であったとされることから、これは関東修験の特徴を示していると考えられるという。この史実に基づく限り、身延七面山は大峰七面山の真言系修験と関東修験の集合した初期の形態であったものと推定されるとされている。このように、これらは日蓮聖人入山以前の七面山の信仰的な存在点について貴重な示唆を与えている。⁽⁹⁾

2節 日蓮宗における七面山信仰

これらをふまえて、次に日蓮宗介入後に語られたと思われる③、④の伝承について見ていこう。

③七面大明神の伝説

日蓮が建治三年（一二七七）に高座石（或いは西谷草庵）で説法をしていると、参詣聴衆の中に妙齡な女性がいた。毎日のように聴聞していた南部実長は、この女性を何ものであるかと思っていた。日蓮が実長の疑いを知って「そなたの本当の姿を見せてやって下さい」というと、女性は「はい、一滴の水を手に入れれば」と答えたので、日蓮は花瓶の水を女性に与えた。すると女性は、忽ち姿を変えて毒蛇となって花瓶に纏わりついた。その後毒蛇は美女に姿を変え、今後身延山を守ることを誓って、七面山の方に去っていった、と伝える。（望月真澄『身延山信仰の形成と伝播』）⁽¹⁰⁾

この毒蛇は竜とも表現される。この竜女が七面大明神だという。七面大明神は日蓮宗と深く関わっている。七面大明神については、次節で詳しく説明する。

④安芸国巖島女の伝承

昔、京中納言師資卿というお公卿さんがおった。子供がいなくて寂しかったため、安芸国の巖島弁才天に祈願をして、一人の姫君を授けていただいた。成長するにつれ、姫君の美しさは評判になり、都の中では誰一人として知らぬ者もなくなった。

東宮の御兄弟の池の宮という貴族が、風の便りに姫君の美しさを聞いて、たくさんの恋文を送った。池の宮は姫君の返事を一日千秋の思いで待ちこがれたが、一向に返事は来なかった。実は姫君も池の宮の真心にうたれ心を動かしていたのだが、ある日突然病に伏してしまった。ありとあらゆる養生を試みたが、効き目が無かった。熱に浮かされ、病に苦しむ姫君に、御氏神の巖島大明神より「甲斐国七面山上の、八功德を具えた七宝の池で水垢離をすれば、すぐに平癒するであろう」とのおおげがあった。

姫君は、はるかな道を踏みわけて七面山の池にたどり着いた。そして身を清めると、たちまち病が治ってしまった。供人の者たちはたいそう喜ん

だが、それも束の間、姫君は、「我は、この池に住むいわれあり」と叫ぶや否や、池のなかへ身を投げて、籠になってしまったのである。都にいる池の宮は、この事態を最も悲しんだ。姫君が病を受けて、甲斐の山中に身を捨てたお話を耳にすると、池の宮は、床が河となるほどの涙を流した。池の宮が姫君を慕う心は強く、唐天竺渡来の薬袋を携えて七面山の隅々を探し歩いたが、姫君を探し出すことはできなかった。山麓の村人へ問いかけても、「みない、みない」との返事ばかりであった。このことから後にそのあたりを「御薬袋」と書いて「見ない」の里と呼ぶようになったのである。池の宮は、姫がこの世にいないとはわかって、七面山から離れず、笛を吹いたり、お経を読誦したりしながら日々を過ごした。しかし寂しさには耐えられなかったのだろう。池の宮もついに命つきてしまった。その後、雨畑の村人たちは小さな社を立てて、池の守護神として池の宮を祀った。⁽¹¹⁾

この伝承中には日蓮関連の記述は一切見られないが、この伝承がしばしば③の伝承とセットで語られていること、そして池に棲む竜神（竜女）の本地についてと池大神の本地について語られているものと推測できるため、筆者はこの伝承が③の後に作られたと考える。

この伝承の中では竜神と池大神は別とらえられているようだ。池の竜は巖島大明神と関わりがあるが、巖島大明神は巖島神社の神様でもとは弁財天である。弁財天は水の神様であり女性の姿をしている。私は弁財天と七面大明神を結び付けるためにこの伝承が語られ、また池大神を古来から信仰していた人々に配慮するため二人の神様の本地を別々にしたのではないかと考える。

3節 七面大明神の考察

前節③の伝承に登場した七面大明神について、詳しく見ていく。

七面大明神とは、正式な名称を末法総鎮守七面大明神という。七面山は日蓮宗総本山身延山久遠寺の裏鬼門の位置にあたるため、七面大明神は身延山の鬼門を守る神様として存在していたが、現在はそれと共に法華経を守護する女神としても信

仰されている。また、七面山山頂付近の七つの池に住んでいるとされ伝承として語られている。伝承③が現在の七面山信仰の主流である。

その本地は諸説あり、吉祥天であるとも、また法華経提婆品の竜女であるともいわれる。その姿は、唐服をまとった女神形で表され、右手に弁財天の持物である鍵、左手に吉祥天の持物である宝珠をとって岩座上に表されるのが一般的である。⁽¹²⁾

日蓮宗には、守護神信仰というものが存在する。代表的な守護神には、鬼子母神、清正公、妙見菩薩、三十番神といったものがあげられ、七面大明神もそこに含まれている。江戸時代の中後期には、各地で守護神堂や礼拝の対象となる仏像や仏画が作製された。⁽¹³⁾

この守護神達は、法華経に登場する神々、日本で古くから信仰されてきた神々、日蓮や日朝、加藤清正などを神格化したもの、星を神格化したもので構成されている。七面大明神は七曜星の紋様で表されるが、それが神格化したものではなく、ここのどこにも属さないものである。他の守護神とは違い、日蓮宗特有の神様であるため、一般的にメジャーではない。

また、七面大明神は、中世に信仰の証を見ることができない新しい神様で、③の伝承はあくまでも伝説とされているため七面山自体も中世には霊山として広く知られるところではなかった。伝説から半世紀以上立ってから七面山も開かれている。

七面大明神は天正21(1593)年に雲雷坊日宝という僧が書いた曼荼羅本尊に勧請されているのが文献上の初見であるとされる。文禄5(1596)年には、身延十八世妙雲院日賢が「七面大明神宝殿常住之守護本尊」を図しており、このことからこのころには七面大明神の神殿が建立されていたことがわかる。⁽¹⁴⁾

第1節、2節で登場した①～④の伝承を見ると、まず①、②の伝承は、古代から七面山の麓の集落で言い伝えられてきた伝承で日蓮宗の影響を受けておらず、いずれも七面山中の池に関する伝承である。そして③の伝承を見ていくと、竜という共通点がみられる。今回使用した伝承にはないが、③の伝承には七面大明神が「私は七面山の一ノ池に棲むものです」と名乗るものもある。こ

のことから池という部分でも①、②の伝承と一致する所がみられる。これを見る限りだと、民俗信仰であった①、②の七面山信仰と七面大明神を結びつけた作為性があるのではないかと感じる。

実は、日蓮の遺文には七面山は出てきても七面大明神は一切登場しない。③の伝承は少なくとも日蓮の生存中語られたものではなく、死後に創作されたものであると考えられる。

七面大明神の伝承は、①、②の伝承を包括しており、④の伝承はそれを整えるためのものなのではないかと私は解釈する。つまり、池大神＝一ノ池の竜神＝七面大明神＝弁財天ということになる。

実は、七面大明神のような竜女成仏の伝承は、日本の全国各地に存在する。前節でも述べたが、日本には山岳信仰が根付いており、険しい山やその山中の川や池などに対する信仰が盛んに行われてきた。水や川を通して現れるカミは一般に竜や蛇であることが多く、このような土着の信仰が深く根付いた土地に、寺を建てたり新たな法を説く場合、古来の信仰を無視することが出来ず、これを習合しようとかかった。このことこそが、このような竜女成仏譚を各地に成立させた原因であろうかと思われる。⁽¹⁵⁾

つまり、元々七面山にあった竜神（水神）信仰に、日蓮宗の介入によって新たな伝承が付け加えられ、尚且つ法華経に登場する八大竜王などとうまく合致して現在の七面大明神信仰は完成したのではないだろうか。

山岳信仰と関わりの深いものに雨乞いの儀式も挙げられるが、七面大明神や一ノ池における雨乞い祈禱の記録も残されており、このことが山岳信仰と七面山信仰の融合を示唆しているのではと私は考えている。

七面山は日蓮宗の霊山になってから霊験を持ったのではなく、古来から民間に自然崇拜されていた。七面山信仰は、初期のこの民間信仰から、その後入ってきた修験道、日蓮宗などが影響し様々な伝承が付け加えられたことによってとても複雑なものとなっている。

七面山信仰で最も重要なものは七面大明神ではなく、一番最初の竜神（水神）伝説である。七面大明神信仰はそこに日蓮宗が関わらなければ誕生しない。

2章 七面山信仰の伝播

1節 信仰の伝播の方法について—うつし霊場—

ここまでは七面山や七面大明神の信仰について見てきたが、2章ではそれらの伝播について考察していく。

一つの信仰が地方まで伝播する方法の一つとして、我が国においてうつし霊場というものが存在する。今節は、宗教に関係なくうつし霊場としての概念を述べたく<1>小嶋博巳「地方巡礼と聖地」⁽¹⁶⁾、七面山信仰におけるうつし霊場について述べたく<2>望月真澄「七面山「うつし霊場」の成立」⁽¹⁷⁾をまとめた形で述べていくこととする。

まず、<1>の論文のタイトルにある地方巡礼とは、全国的な知名度をもたず、限られた地域の人々だけが行う巡礼、信仰圏が地域的に限定されている巡礼のことを指す。

またその一方で、その信仰が全国的な普遍性を持ち、実際に全国各地から広汎に巡礼者を集める巡礼のことも指す。（これを表現する適切な語がないため、以下大巡礼とする）

例として、西国三十三カ所、坂東三十三カ所、秩父三十四ヶ所の三種の観音巡礼、弘法大師の四国八十八カ所の巡礼（お遍路）などが挙げられる。

しかし、全国各地ではこれらのほかに、夥しい数にのぼる多種多様な巡礼が行われてきた。そしてそのほとんどが何程かの地域性・局地性を伴った地方巡礼なのである。

地方霊場が特に大霊場をモデルとして強く意識し、聖地としての意義づけの上でモデルに大きく依存している場合、これをうつし霊場と呼ぶことがある。この場合のうつしとは、いわゆる勧請という操作が、聖地のセットとしての霊場という単位で行われることだと解することができよう。典型的な例では、うつしはモデル霊場の聖地構造の写しと、モデル霊場のシンボルの移しというふたつの手法によって実現される。

まず、聖地構造の写しは、モデル霊場の札所数や各札所の本尊の配列、札所の地理的配置・環境などを模倣することである。モデル霊場のシンボルの移しとは、札所の土砂（お砂踏み）の勧請で

ある。四国八十八か所などのたくさんの霊場を巡礼するパターンで使われるのではないか。これはうつし霊場開創の典型的なパターンである。

一般的なうつし霊場開創の目的は、容易に巡礼することの出来ない遠方の大霊場を身近に引き寄せることで、より多くの人々をたやすく巡礼せしめることにある。

私たちになじみのあるものを挙げるとするならば、千葉県の真言宗の総本山である成田山などがある。成田山は別院、分院、末寺などという形をとっている。本山は千葉ではあるものの、関西でいうと大阪に成田山大阪別院明王院という大きい別院があり、別院、分院、末寺などを合わせると約80近くにもものぼる。そして八幡宮、天満宮、お稲荷さんなども、本社の他に小さいものから大きいものまで全国の広範囲にわたって分布しており、これも似たようなものではないかと私は考える。

うつし霊場は一般に規模も小さく、多くは1日ないし数日でまわれる。その巡礼は苦行性の強い大巡礼に対して易行であることを特徴とする。宗教的資質の劣った者、年齢的なハンディキャップを負った者にも可能な行として一国内・一郡内に勧請されたうつし霊場の巡礼が位置づけられている。しかしまた、このことは行としての価値の点で、これらの巡礼が大巡礼よりも劣ったものと位置付けられているとみることもできる。うつし霊場巡礼の特徴とする易行性が、その行としての価値を低いものとしているのである。

望月は<2>の論文の中においては七面山信仰についてのうつし霊場しか明記しておらず、一般的なうつし霊場に関しては小嶋博巳が一地方巡礼霊場の特徴の中で、巡礼霊場のうつしについて考察し、地方巡礼の易行性と霊場の流動性を明らかにしている⁽¹⁸⁾ということ、池田暁子がミニチュア巡礼地について考察し、各地にミニチュア霊場が創りだされているという事例を紹介している⁽¹⁹⁾ことを述べたのみとなっている。

日蓮宗において、山岳信仰における霊場は身延山及び七面山信仰であるが、守護神信仰において考えると能勢妙見山の妙見菩薩、熊本山妙寺の清正公、中山法華経寺の鬼子母神といったものも守護神の霊場として数えられる。

七面山信仰におけるうつし霊場について、望月は、七面山は山岳信仰の霊場としての捉え方で考え、七面大明神は守護神として考えている。七面山は身延山の鬼門除けの位置にあることから末法の鎮守として信仰され、懺悔滅罪の霊場として身延山の重要な信仰地域として存在している。従来の身延山の霊場区分において、七面山は身延山の一霊場として個別に把握されていた。七面山信仰はもともと、身延山信仰に山岳修行の要素を付加するため取り込まれたもので、それ自体が独立してはいなかった。望月は身延山の霊場の性格と七面山信仰の地方伝播については未だ考察されていないと述べている。

しかし私は、法華経を信仰していた人々が本山である身延山を守護する七面山にご利益を求めるのは当然なのではないかと考える。

七面大明神は法華経の守護神ということから、全国の日蓮宗寺院で祀られている。もちろん七面山の霊場も全国各地に存在する。

望月によると、七面山本社の霊場としての構成要素の定義は、小嶋博巳の聖地構造のうつし、モデル霊場のシンボルのうつしで考えるとこのようになる。

- ①山 七面大明神をまつる山岳信仰の霊場としての位置づけがある山がある。(七面山)
- ②池 七つの池の伝承がある。
- ③滝 身を清めるため。
- ④堂宇 山頂に七面堂を建立する。
- ⑤仏像 七面大明神の仏像安置
- ⑥参道 参詣道があり、50丁ほど。
- ⑦鳥居 参道や池畔に鳥居がある。
- ⑧灯籠・丁石 参道の道標として建立される。

これらの構成要素がどれだけその霊場にうつしだされているかが鍵となる。うつせていれば、そこはうつし霊場となる。このほかに、⑤の仏像が分体したものがある寺院を分社と呼ぶ。望月は論文の中で、代表的なうつし霊場の例をいくつか挙げていますが、それはほんの一部にすぎない。このように、地方に構成要素をそっくりうつした霊場は、その地方における信仰の拠点となり、望月が挙げた例を見ると関西地方においては京都府

にある深草山宝塔寺が身延七面山に参詣できない信徒たちの霊場として展開していった。そして、山梨県の北の池七面大明神は、本山が約2000mの高山であるため、足や体の悪い信徒が参詣できない場合のうつし霊場となっている。(写真6) また、山梨県の大原野七面大明神はこれらの構成要素のすべてがうつされた霊場で、これは七面山の反対の山裾に位置している。ここに安置されている七面大明神像は本山の像と分体であるとされている。(写真7)



写真6 北の池七面宮



写真7 大原野七面宮

そしてこれらのうつし霊場は共通して江戸中期ごろから成立していることから、望月はこの時代に一気に七面山信仰が広まったのではないかと述べている。以上のことから地方にうつされた霊場は、その地方の熱心な信徒たちにとってとても重要なものであったことがわかる。

これは私の推測だが、わざわざ遠方にそっくりな霊場を作るまでの規模の霊場は当時の人々にとって相当ご利益を感じるものであったのではないだろうか。これにより、元の信徒ではない人にも多

く広まったのではと考えた。そして、伊東の実家である妙巖寺もこれにあたるのではないだろうか。それに関しては最終章で考察したい。

2節 七面大明神伝播に影響を及ぼしたもの

この節では、第1節で取り上げたうつし霊場以外に七面大明神がどのように信仰を集めたのか述べていく。

1章でも述べたが、守護神信仰の展開によって身延山内では、七面山の霊場が江戸市域を中心に宣伝されるとともに、七面大明神に対する信仰が全国的に広まっていった。甲斐国内の寺院にも、七面大明神の尊像が元禄期に勧請されるようになり、その仏像を祀る七面堂が各地に建立されていった。では、江戸市域にどのようにして宣伝されていったのであろうか。⁽²⁰⁾

まず一つ言えることは、1章に出てきた④の様な日蓮と七面大明神の伝承が語られることによって、七面山や七面大明神が身延山および日蓮と関係があるということが認識されるようになったことがあるだろう。その上で、曼荼羅や絵画に登場し、他の日蓮宗の守護神と共に描かれることにより後から出てきた神様であってもそれらの神様と同格と位置付けられたと考えられる。

富山県高岡市の海秀山大法寺には、江戸時代に長谷川等伯によって描かれた五幅対の絵曼荼羅が所蔵されている。本図の概要を記すと、1. 三宝尊(一塔両尊)、2. 日蓮聖人像、3. 鬼子母神十羅刹女像、4. 護法神像、5. 三十番人像からなり、全て絹本着色である。絵師と制作年代の明記はないが、全幅に開眼供養を行った僧侶のものとみられる「日俊」の署名と花押がある。この日俊とは、能登滝谷妙成寺第十八世・下総中村檀林第十二世の修禅院日俊(?~1683)であることがわかっている。

大法寺には、これとは別に長谷川等伯が永禄7年から9年(1564'6)にかけて描いた五幅対の絵曼荼羅がある。こちらの概要は、1. 七字題目、2. 日蓮聖人像、3. 釈迦多宝如来像、4. 鬼子母神十羅刹女像、5. 三十番人像(1のみ等伯の作品ではない)である。最初に挙げたほうが後からつくられた作品になるのだが、この二つを比べてみる

と七字題目が抜けており、護法神像が加わっているという違いがみられる。この護法神像は「極めて特異」な図像とされるもので、十二の善神が描かれている。画面上段には日・月・明星の三光天使が三角形の配置で描かれる。中段には持国・増長・広目・多聞の四天王、不動・愛染の二明王、下段には大黒天・七面大明神・妙見菩薩が三角形の形で描かれている。最下の七面・妙見の二神は波の上に立ち、他の十神は空中に涌現する構図である。上段両脇には「為悦衆生故」「現無量神力」の経文が金泥で書かれ、下段中央に前述の日俊の署名花押がある。

以上のことから、この二つを比較すると日蓮宗の守護神信仰の変遷過程がみてとれるのではないか。新たに加えられた大黒天神・妙見菩薩・七面大明神のうち、七面大明神は中世にその信仰の証をみることでできない新しい守護神であり、その存在は注目に値する。

慶安4(1651)年に山麓の赤沢・雨畑の両村が山境を争ったことを契機に、七面山は行政的にも久遠寺の支配下にはいった。このころから、江戸や京都に七面大明神の勧請がみられ、これらを契機として七面信仰は急速に広まっていった。高岡大法寺所蔵絵曼荼羅もほぼ同年代の古いものであると考えられるため、七面信仰の地方伝播という点では注目されるべきである。⁽²¹⁾

つまり、知名度も信仰もある神々と同じ配置で描かれるということは、世間に知られていなかった七面大明神の知名度やありがたさを伝えるため、もしくは人々のなかで、もうそれらの神々と同レベルの神様になっていたということだと考えた。また、徳川家康の側室の一人である養珠院お万の方(1577-1652)が日蓮宗を信仰しており、七面山の女人禁制を解いたこともあげられるだろう。法華経は諸教中、女人成仏を説く唯一の經典であって、女性を嫌うというのは法華経に背くものである⁽²²⁾と考えたお万の方は寛永17(1640)年、山麓の白糸の滝に七日間うたれて心身を浄め、七面山に登詣したのであった。これにより、女性も七面山に登詣できるようになった。

現在の東京都新宿区にある亮朝院に慶安元年に勧請された七面大明神を見てみると、元禄年間から宝永年間(1688-1711年)にかけて江戸の大奥女

中衆の間で爆発的なブームとなって流行する所となったという。大奥女中の参詣は物見高い江戸庶民の話題となり、境内は一般庶民の参詣人で賑わい、出開帳などと重なって七面大明神の信仰は江戸一円に広まっていったと思われる。⁽²³⁾

3章 熊本県荒尾市七面山妙巖寺における七面山信仰伝播の考察

1節 七面山妙巖寺の起こり

いよいよ3章、私の実家である七面山妙巖寺についての謎を明らかにしていこうと思う。なお、3章で登場する小字に関しては本論文付録①の小字図で確認していただきたい。

まずこの研究を始めた際、既にわかっていた妙巖寺の起こりについて見ていこう。

妙巖寺(写真8)とは、山号を七面山とし、通称樺七面山と呼ばれている。所在は熊本県荒尾市樺である。(地図②)

現在その沿革は次のように語られている。享保2(1717)年10月に御山奉行荒牧藤助が甲州身延七面山より七面天女を奉持し勧請、小岱山の八丁どんど(どんどん)という所に祀った。明治初年の廃仏毀釈の法難に遭い、管牟田神社を称して難を逃れる。明治27(1894)年10月14日、七面山妙巖寺開山上人義淵院日底上人の夢枕に七面大明神現る。「19日吾山に参るべし」との御宣告により、19日入山。日蓮宗寺院として発足した。⁽²⁴⁾なお、寺院としての発足地は八丁どんどではない。



写真8 明治33(1900)年建立 妙巖寺山門



地図② 斜線部が荒尾市

妙巖寺の伝承を文献化したものは荒井繁『魅せられたる小岱の里』—I、麦田静雄『荒尾史話』—IIのみの模様である。それぞれ紹介しよう。

—I 小岱山はまた別に七面山と呼ばれる俗説があり、いまなお、日蓮宗信者間では七面山と云う人が可成り多い。それと云うのは今より三百四十年前（寛永9（1632）年）上樺の住人荒牧藤助と云う仁が、身延山に入り日蓮宗信者の荒修業を終えて帰郷する際、七面天女の仏像を請い受けて帰り、菜切川の最上流の八丁どんと云う水溪清らかな畔りに堂宇を建てて、ここに祀った。霊験あらたかなところから参詣者が遠近より集まったと云う。今から八十数年前（明治20年代）この地方が豪雨に襲われた時、この堂もろともに水に呑まれたが不思議にも七面天女の仏体は現在地（妙巖寺）に打ちあげられて、巨岩の上に安坐していたと云う。⁽²⁵⁾

—II その頃（享保の頃）、樺村に、日蓮宗の熱心な信者である荒牧藤助がいました。日蓮宗の総本山は、甲州身延山の久遠寺で、そのすぐ西にある七面山には、この宗の守り仏といわれる七面菩薩が祀ってあります。翌二年（享保二年）、藤助ははるばるここに詣で、分神を受けて帰ると、小岱山の山ふところの俗に八丁どんと云う水辺に石の祠を建てて祀りました。するとこの七面菩薩は、

なぜか七面天女と呼ばれ、これわら高瀬方面（現熊本県玉名市）に信者がふえて行きます。あとで、いまの所に堂が建てられると、七面山堂と呼ばれ、このあたりの山は七面山と呼ばれるようになり、それにつれて、小岱山そのものも、いつとなく七面山とも呼ばれるようになりました。これは、甲州の七面山から来た呼び名であるのに、あとでこのいわれが忘れられると、小岱山はどこから見ても同じ形に見えるところから、七面同形という意味でつけられた名であるといわれるようになっていきます。この頃、玉名郡の地形は、・中富を首にして亀の形に似、・小岱山を背負って蓬萊の像といわれました。⁽²⁶⁾

I の伝承は、著者の荒井がおそらく自ら聞いた口頭伝承を文献化したもので、妙巖寺に聞き取りがあったわけではないため、誤った情報もある。一つ目の誤りは、七面大明神を勧請した年で正しくは享保2（1717）年である。もう一つは豪雨でお堂が水に呑まれた年で、この伝承では明治20年代と言われているが、その年代には既に寺院として発足する準備が行われて、現在の妙巖寺の場所に七面大明神の尊像も移っていることからこの情報は誤りである。しかしながら、お堂が水に呑まれたのは事実とされており、時期は不明とされている。

また、『荒尾市文化財調査報告 第6集 荒尾市の文化財（I）東部地区（大字菰屋・野原・川登・金山・樺・府本・平山・上平山）』⁽²⁷⁾ という資料は、I と II の資料で藤助の七面大明神勧請年が85年ずれているため、七面大明神の勧請の時期は何を根拠としているのかと疑問を呈している。しかし、II の資料における享保2（1717）年を読み取れる資料が妙巖寺に複数残っているため、根拠がないのはI の資料となる。この荒尾市文化財調査報告は、漢字の読み取りの間違いなどによる誤った情報が多すぎるため修正が必要であるが、妙巖寺について重要な考察をし、文献として残っているということは私の研究にとってとても有意義なものである。そして、II の資料には「水辺に石の祠を建て」という記述があるが根拠は見られない。

これらを見ると、享保2（1717）年に七面大明神が勧請されてから明治27（1894）年妙巖寺建立ま

日蓮宗における七面山信仰伝播の考察 —熊本県荒尾市樺七面山妙巖寺成立過程—

での間の情報がほとんどないことがわかる。つまり、建立までどのような形態で祀られていたのかわからない空白の177年があるということである。

また、先ほども伝承の所で少し触れたが、口頭伝承によると、この空白の177年の間に、七面大明神の尊像は山津波に遭い小岱山の八丁んどから1キロメートルほど下流に流されており、その際四反田氏子複数名の夢枕に立ち現在の妙巖寺の七面堂の場所に流れ着いていると知らせたという。つまり七面大明神は御宣告する神様であるのだ。

次に、妙巖寺に現在残されているものについて見ていこう。

まず、一番重要な七面大明神の尊像(写真9-1)だが、尊像には「享保二年酉年、奉建立七面大明



写真9-1 妙巖寺蔵 七面大明神像

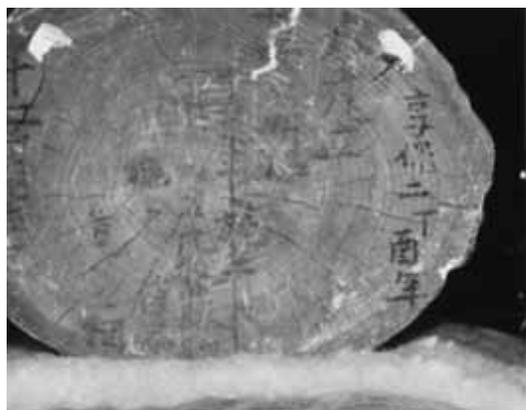


写真9-2 尊像裏書

神 建立之施主 荒牧藤助 佛師 □忠 覚了一相 十二月吉日」とあり、沿革の享保2年の根拠はこれにみられる。(写真9-2) □の部分を読み取れない部分である。

そして、妙巖寺境内の石燈籠に「文化十有二年亥(1815)十二月吉日 古澤寿平太貞行 櫻井文吉宗信」(写真10-1、-2、-3)「文化十有二年亥十二月吉日 古沢寿平太貞行 山ノ口尉平宗勝」(写真11-1、-2、-3)の刻銘が見られる。ここに登場する古澤寿平太貞行というのは、惣庄屋の一族で御山支配役を務めていた人物である。そのためか妙巖寺がある荒尾市の山の神の祠には彼の石燈籠が多くみられる。荒尾地方には山の神信仰というものがあり1、6、9月の16日は山の神が



写真10-1 石燈籠



写真10-2 櫻井の文字あり



写真10-3 文化十有二年とあり



写真11-3 文化十有二年とあり



写真11-1 石燈籠

木の種をまく日、猟をする日などといって山仕事を休み、山の神祭りを行っていたという。そしてこれらを惣庄屋が御山支配役として職務内容にしていたという。⁽²⁸⁾つまりこのことから、この地域では山の神様の存在が信じられ、山に特別な感情を抱いていたことがわかる。さらに、七面大明神はきちんと山の神様と認識されていたことがうかがえる。また、尉平宗勝というのは、現在も檀家である松村家の祖だという。

そして、七面堂北側の石堂に、「天保十四年（1843）二月吉日再建、仙左エ門、林助 四反田氏子」の記名が見られる。（写真12-1、-2）四反田とは妙巖寺近くの集落である。現在の妙巖寺の境内並



写真11-2 尉平宗勝、古沢寿平太貞行



写真12-1 石堂



写真 12 - 2 天保十四年二月吉日再建

びに参道敷地はこれらの四反田氏子孫の檀家及び信者らの土地の寄進による。

そして仙左エ門、林助も先程の松村家と、もう一軒別の松村家の祖であり、現在も檀家である。つまりこれらことから推測すると、石燈籠のおかれた文化 12 (1815) 年の時期には既に御影は最初に祀ったとされる八丁どんどから現妙巖寺の場所にうつされ、天保 14 (1843) 年には改建の石堂に奉安されていたことになるのではないかと推察される。しかし、石造物の移動は簡単のため、考察は必要であろう。

また、旧七面堂 (写真 13 - 1) の棟札 (写真 13 - 2、- 3) に「文久二年 (1862) 四月二日～」とあり、旧七面堂の建立の様子がうかがえる。こちらにもまた、「樺村氏子」という字も見て取れるため、当時は七面大明神を祀るお堂であったことがうかがえる。このお堂は昭和 51 (1976) 年に建て



写真 13 - 1 文久 2 (1862) 年妙巖寺七面堂

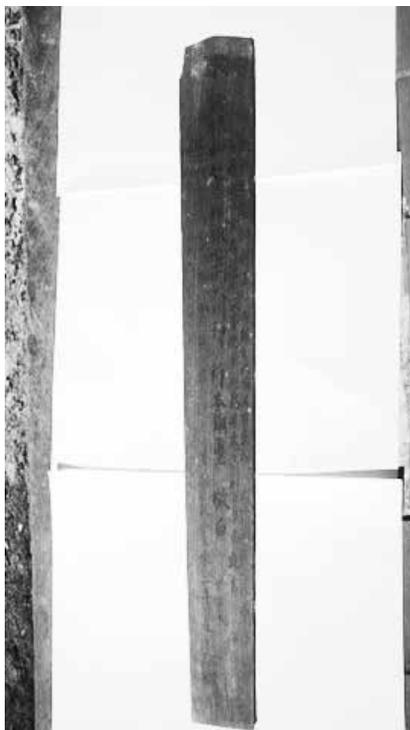


写真 13 - 2 文久 2 (1862) 年 七面堂棟札



写真 13 - 3 写真 13 - 2 の裏面



写真 13 - 4 昭和 51 (1976) 年七面堂

替えられ現在の七面堂(写真 13 - 4)となっている。

第2節 荒牧藤助が七面大明神を勧請した理由の考察

この節では、七面大明神を勧請した荒牧藤助(写真 14)について探っていく。



写真 14 明治 30 (1897) 年妙巖寺蔵荒牧藤助像

藤助は、甲州身延山久遠寺より七面大明神を請来したとされ、樺の中平(なかでら)地区に墓(写真 15 - 1、15 - 2)がある。この中平という地名は、以前この辺りが寺屋敷だったことから来ているというが、資料はない。藤助の墓石の隣には両親の墓とみられる墓石もあり、それらにはそれぞれ母親は宝永 7 (1710) 年、父親は正徳 3 (1713) 年に亡くなったという記述がある。このことから両親の死は七面大明神勧請(1717 年)以前であったこ



写真 15 - 1 荒牧藤助墓 髭題目



写真 15 - 2 荒牧藤助墓 家紋、戒名

とがうかがえる。これらの墓石には日蓮宗特有の『七字髭題目』がみられ、以上のことからこの墓石は藤助が七面大明神を勧請した以前に、上樺地方の一部に日蓮宗が流布していたことを示す重要な

遺品であるとされている。⁽²⁹⁾ また自作とみられる家紋も見られる。藤助の墓地の周りには両親の墓の他にも小さい墓が複数あるようだが荒れ果てていてどういう人物の者なのかわからない。しかし、藤助の墓が一番大きく立派である。

私はあの時代に山梨から七面大明神を勧請し立派なお墓もあるにもかかわらず、藤助の情報がこれ以上ないことに疑問を持った。これだけのことをしたならば大きい家のお金持ちなのではと考えた。そこで家紋や名字で考察し、御山奉行という役職についていた人ならば役職帳やお侍帳に名前があるのではないかと考えそれらを当たったが手がかりは全くつかめなかった。しかし今回の研究における資料収集において、藤助は別として故荒木大成氏（檀家）が生前、本家で七面山の資料を見たと言っていたとの情報を受け、荒木家本家の方を知っている方に連絡を取ってもらいその資料を見せていただけることになった。その資料名は『荒木家系図』というもので、最後のページにこの家系は明治30（1887）年から昔325年の歴史があるとあった。（写真16-1）

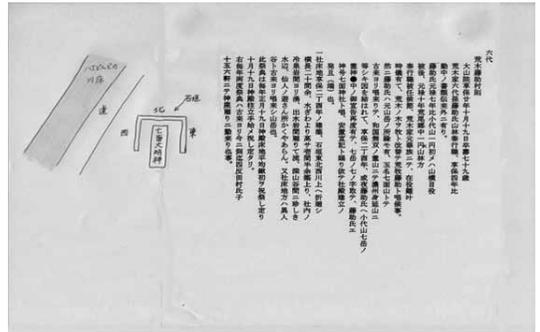


写真16-1 荒木家系図 表紙

協力してくださったのは福岡県大牟田市在住の荒木登志夫氏（83）で、現在お一人でこの資料を管理されている。この荒木家というのは当時の樺

村の庄屋であり、当時の樺村をたばねていたと言ってもいい家であった。また資料1ページ目には、この家系は織田信長の家臣荒木村重の家系であるとあった。

資料については<資料①>を見ていただきたい。この資料は荒木氏にいただいたものを使用している。その内容を簡単に見ていくと、次のような記述があった。



<資料①> 『荒木家系図』(写真16-2、-3)の部分



写真16-2 六代荒木藤助村則



写真16-3 16-2の続き

訳：筆者

六代の荒木藤助村則は山林奉行職に就いていた。

荒木の木を牧と改め荒牧藤助と名乗る。山林奉行職のため、山の所有がある。玉名七面山と古来から言われていた山（小岱山）と身延山とを等しい因をむすび、享保二年七岳の霊神、夢の中で御宣告があり七面神社と唱え七面大明神の尊像を賜り安置し、社殿を建立した。

つまり、この資料によって、荒牧藤助が荒木家六代荒木藤助村則であることが判明した。

そして、妙巖寺の前身にあたる社殿がどのような流れで建立されることとなったのかも記されており、享保2（1717）年の年号も見られる。続きを見ていくと、どのような社殿であったか詳細に記されている。

石垣が東北西川上へ囲った形で横長3.6メートル、水際より高さ2.7メートルであった。社内の岩間から冷泉が湧き、それが岩間をまわって流れている。深い山には珍しい水辺で、まるで仙人が住んでいるところのようである。また社床地は古来から異人谷と呼ばれていた。毎年正月の19日に楯初の祝祭、10月の19日には神殿柱立のお祝いを四反田氏子15、6軒でまわりながら勤めている。

この資料によって、今まで明らかではなかった社殿の様子がうかがい知れる。〈資料①〉に描いた図のような形で祀られていたと思われる。深い山には珍しい水辺、仙人が住んでいるところのようだという記述は、1章で述べた山岳信仰の生まれる山、2章で述べたうつし霊場の形式にも非常に酷似していると考えることができる。また、記述に見られる19日の法要は、日蓮宗寺院となった現代でも続いている。

本来ならば、家系図のような資料は家をよく見せるために書いてある場合も多いため、このような歴史的な事実を探る資料としては望ましくないが、今回は社殿の設計などがあまりにも細かく記されており、書かれた当時はこの資料のほかにも資料があったと記されていることから何かを写している可能性も考慮し資料として使用することとする。

この資料の記述を受けて、現在の八丁どんど（写真17-1、-2）を見に行った。すると、八丁



写真17-1 八丁どんど



写真17-2 川床が全て石でできている



写真17-3 八丁どんど向い斜面 石垣跡

どんどの向かいの斜面に石垣の跡（写真17-3）が見られた。水を流す部分のようだ。この資料で社

殿が建っていたとされる場所だが、七面大明神の社殿の石垣かどうかは不明である。しかし、この場所に近年人工的なものがあったことはないという。現在はキャンプ場への道路やダムが整備された。見た目は当時とは違ったものであるだろう。

また、八丁どんどについて調べている際にこのような資料が見つかった。

<雨乞>

[部落] 樺全体

[月日] 夏の干ばつ時

[対象] 部落民

水田の水不足時期に樺区として雨乞祭を開催する。区長を筆頭に区の世帯主が全員出席し、龍の頭（上区は雄で口をあける。下区は雌で口をとじる。）を作り、尾は白山神社の幕を利用し、神官のお板を受け、龍に眼を入れ、太鼓（公民館に保存）、ブアン貝（竹でつくる）を打ち鳴らし、白山神社から「今年の雨乞にゃ、八幡さんにはなんあげよかどじょ取って、どじょあげよか どじょがおらなきゃ のつけらほい」と歌いながら龍を先頭に有志家を回りながら八丁どんどまで行き、八丁どんどでは、「もうーじゃろ、雨じゃろ、明日どま雨じゃろ、龍が雲を呼んで、雲が雨をよぶじゃろ」と云って、龍を八丁どんどに流す。戦後は実施されることがない。（府本小学校PTA 調査広報委員会編『ふるさとマップ<再版>』⁽³⁰⁾）

八丁どんどという地名の由来は、八丁先まで水が流れ落ちる音が聞こえるという意味であるようだ。川床がすべて石でできているためと考えられる。

この資料から考察すると、雨乞いの儀式に龍を用いているというのは樺地域および小岱山に山岳信仰における竜神（水神）信仰があったことを示唆するのではないかと。本家七面山においても、七面大明神に対してや山中のノ池を対象とした雨乞いが行われていた。八丁どんどに龍を流すという行為は、竜神であり水神である七面大明神の社が元々八丁どんどにあったからであろうか、流されている龍は七面大明神なのか、それとも、文中に八幡〜という記述があるため、七面大明神ではない別の竜神（水神）が樺地区で信仰されていた

のか真相はわからない。しかしながらこの場所が『荒木家系図』にも見られるようにこの地区で神聖な場所とされていたことは確かであろう。

では、荒牧藤助はなぜ七面大明神を考察したのだろうか。『荒木家系図』の藤助の記述以外の部分に、樺に現存する小さなお宮のほほすべてをこの荒木家が作ったという記述があり、その流れから藤助も七面大明神の社を建立したのではないかと考えられる。藤助が所属していた荒木家は当時の樺村を仕切っていた家である。あの時代にこのような田舎から山梨まで行けたのはそのためだと考えられる。七面大明神の尊像をもらいうけたのもそのためではないか。簡単に手に入れたのであれば日本中にもっと同じような像があるはずである。江戸時代、七面大明神は信仰を集め、一種のブームとなっていたことと、藤助の墓から彼が日蓮宗信者であったことがわかることから彼は日蓮宗の守護神であり山の神水の神である七面大明神を勧請したのではないかと。

しかし、『荒木家系図』を見せてくださった荒木登志夫氏によると、藤助は日蓮宗信者ではあるものの家系は他宗を信仰していたという。つまり藤助のみが例外で日蓮宗信者だったということである。そのため藤助だけ改名したのだろうか。なぜ彼だけが日蓮宗を信仰することとなったのか、その真相には深い考察が必要であろう。

第3節 日蓮宗及び七面山信仰の荒尾市樺地区への伝播考察

この節ではまず熊本県及び荒尾市における宗教事情を見ていこう。

室町時代永享5（1433）年、現在の千葉県にある中山法華経寺から九州総導師として久遠成院日親上人が現在の佐賀県にある松尾山光勝寺へ派遣されたことにより、九州に日蓮宗が上陸した。日親上人及び弟子たちは、佐賀県（肥前国）から日蓮宗を布教しはじめ、熊本に入った際に現在の熊本県玉名市（荒尾市の隣、地図②参照）高瀬に妙法寺を開いた。そのため熊本県で最初の日蓮宗寺院はこの妙法寺であるとされている。妙法寺の山号「久成山」は久遠成院から来ているという。この妙法寺を建てた後、日親上人は「菊池川以南には熱

誠なる信者が出現して、妙法を弘通せらる、兆あり」と言い、現在の熊本市の方面ではなく大分に向かったという伝承があり、後に現在の熊本市周辺地域では加藤清正が熱心な日蓮宗信者であったことから日蓮宗が盛り上がり、その後に清正自体を神格化した信仰である清正公信仰へと発展していくことになる。

加藤清正とは、安土桃山時代から江戸時代初期にかけての武将・大名で、肥後熊本藩初代藩主である。熱心な日蓮宗信者であり、文禄慶長の役には「南無妙法蓮華經」の赤幟を持って戦場に臨んだ。実は、高瀬の妙法寺は一度廃寺寸前になっていたというが、清正により再興されている。⁽³¹⁾

清正はとくに干拓や河川改修による新田開発に力を入れており、荒尾一帯にも実際に訪れて治水



写真 18 - 1 硯川 妙見堂



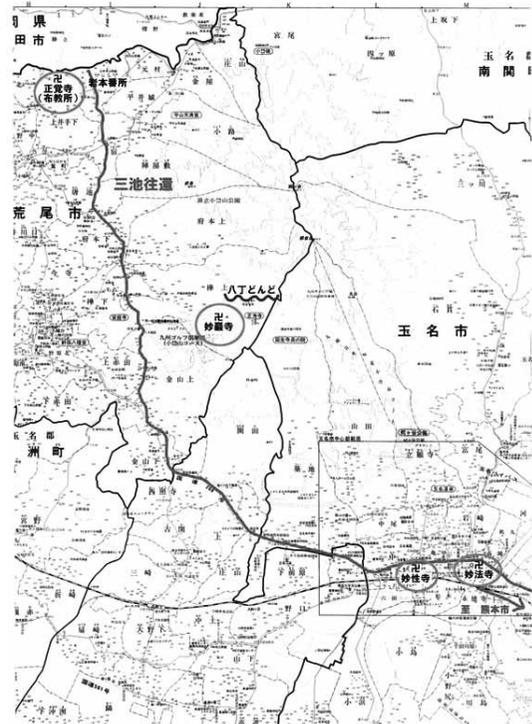
写真 18 - 2 妙見堂内 妙見菩薩像
加藤清正像

事業を行ったという。また、清正が治水事業を行った場所の一つで、妙巖寺から車で5分ほどの所にある硯川という地区には水の神様を祀る妙見宮がある。妙見宮で祀られている妙見菩薩は日蓮宗の守護神の一つであり日蓮宗寺院において祀られることも多いためたずねてみると、妙見宮には加藤清正と一緒に祀られていた。(写真 18 - 1、- 2)

いつからこの形態になったかは分からないが、考えられるのはこの辺りの治水に貢献したため一緒に祀られているという点と、日蓮宗の守護神信仰である清正公信仰として祀られているのではないかとこの点である。私は清正が治水事業を行いこの地域の人々に感謝され、後に熊本県で清正公信仰が流行した際にこの地区で清正が信仰されたのではないかと考えた。つまり清正公信仰も後にきちんと入ってきているということではないか。

これらのことから考察するに、荒尾市玉名市周辺地域と熊本市周辺地域の日蓮宗の伝播の方法は違うと考えられる。

荒尾市内では浄土真宗の寺が西・東共に多く、信徒もまた多い。山手（小岱山）では日蓮宗の信徒も多く他に禅宗の者や近年になって入ってきた



地図③

宗教の信者もいる。⁽³²⁾

現在荒尾市の日蓮宗寺院は五カ寺で、藤助が七面大明神勧請する以前からある寺院はない。また、寺院としての成立も妙巖寺が最も早い。しかし現在の正覚寺の場所は妙巖寺が成立する頃に荒尾玉名周辺地域において日蓮宗の布教所となっていた。⁽³³⁾

また、荒尾市の隣玉名市の日蓮宗寺院は二カ寺で両方とも妙巖寺成立以前から存在する。一方が先ほど登場した熊本県でもっとも古い歴史を持つ高瀬妙法寺、もう一方は妙性寺である。⁽³⁴⁾ この三カ寺は三池街道上にみることができ、このちょうど真ん中に妙巖寺がある。(地図③)

妙巖寺は荒尾市の中心部ではなく玉名市との境に位置し、また以前は玉名郡に位置していたことから、私は玉名からの影響の方が強かったと考えている。

つまり、玉名から入ってきた日蓮宗の影響を受け、日蓮宗及び七面大明神の信仰が荒尾に伝わったと考えている。

高瀬の妙法寺の名がみられる資料(写真19)が妙巖寺から発見されたため、これを見ていこう。

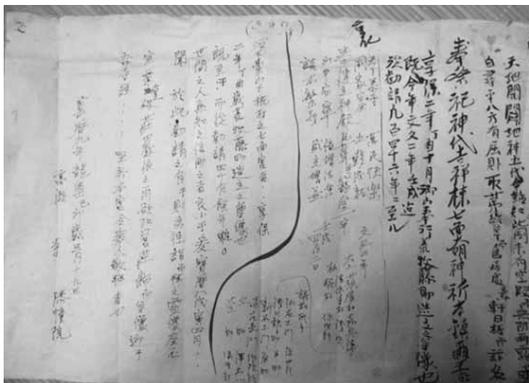


写真19 写真中央線より左

【高瀬妙法寺十九世 勝幢院】訳：筆者

小岱山のふもと樺村の七面宮に享保2(1717)年荒牧藤助が尊像を勧請してからすでに40数年経った。世間の人々は信仰に対して無知であると宝暦8(1758)年に聞き樺村七面堂をたずねるが、霊堂は荘厳が壊れていたため再び装飾を加えてお祀りしようと私の寺でお経をあげてみんなに拝んでも

らった。

この資料は写しであるため原本はない。写したのは妙巖寺開山上人義淵院日底上人である。ただ、妙法寺で確認をとったところ、高瀬妙法寺十九世勝幢院の名と、宝暦8年に妙法寺十九世であったことは事実であった。

この文章は、勝幢院が樺村七面堂の由来を書いたものだと考えられるが、後半の内容から、傷んでいたもしくは廃れていた七面大明神像を一旦装飾しなおすために高瀬の妙法寺が回収し、お題目をあげたと考えられる。世間の人々が信仰に対して無知だったというのは、七面大明神が藤助の死後日蓮宗の守護神としてお祀りされていなかったことを指すのではないか。七面大明神は日蓮宗のお題目によって救われ七面山を鎮守するようになった神様と言われるため、お題目をあげなければならぬが、この時四反田の人々はそれをしていなかったのではないだろうか。

これによって高瀬妙法寺が七面大明神の維持に深く関わっていたことがわかる。そして小岱山下とあることからこの時は既に伝承にある山津波の後だったのではないか。

では、なぜ小岱山に七面大明神が必要だったのか。それは小岱山が荒尾玉名周辺地域で最も規模が大きく高い山であることがある。そして、荒尾市の水の源菜切川の出発点であることも要因の一つと考えられる。

本家の身延七面山信仰においても信仰の対象に山頂のノ池が含まれる。七面大明神は竜の神様で空・土・水をつかさどる。妙巖寺の七面大明神は、荒尾市を見渡せ、水源の源となる小岱山から有明海を望み、私たちの生活の鎮守をする役割があったのではないだろうか。

そして、廃仏毀釈の際、わざわざ神社の名前を変えて神主をつけるという大掛かりなことまでしてなぜ七面大明神の尊像を守ったのか。そこには当時の四反田の住民の熱い信仰心が垣間見える。

妙巖寺は、日蓮宗寺院として荒尾市で一番早い成立である。しかしそれは明治時代のことであった。つまり、江戸時代檀家制度が始まった後に妙巖寺になっているということである。檀家制度とは、江戸時代の宗教統制政策で、この制度により、

家々は特定の寺院に檀家として属さなければならなかった。そのため、四反田のほとんどの家は、七面大明神は信仰していたものの、妙巖寺成立以前すでに存在していた他宗の寺院の檀家であった。

七面宮という山・水・地域の鎮守の神様だけの信仰から、本来の日蓮宗の神様としての七面大明神信仰へとシフトしたことから、すでに他宗の檀家であった当時の四反田の人々には切り替えが難しく、時代の流れと共に七面大明神としての信仰を減らすこととなったのではないだろうか。中でも信仰心が篤かった四反田の住民の半分は、改宗して妙巖寺の檀家となっている。

しかし、七面山信仰は地域に定着しており、現在でも当時の信仰の名残で、盆と正月は檀家でなくても四反田の家々にお経回りをし、田植えの後には妙巖寺で豊作祈願を行う。

第4節 妙巖寺のうつし霊場考察

これまでに妙巖寺の成立が少し明らかになった。これらを元に、妙巖寺が寺院としての成立以前に七面山本山のうつし霊場としての形式を取っていたのかを第2章の1節で望月が用いていた構成要素にあてはめて考えていこうと思う。

まず、①七面大明神をまつる山岳信仰の霊場としての位置づけがある山があるのだが、これは妙巖寺の七面大明神が祀られていた小岱山をそれと考えると良いのではないか。

次に②の池または七つの池の伝承があるのだが、池の存在は確認できないが八丁どんという霊験あらたかな水辺の畔に祀っていることから水辺という点では一致する。現在の妙巖寺も菜切川の畔に建っている。また、③の滝も確認は出来なかったが身を清めるための水辺という点では八丁どんが当てはまるのではないか。なお妙巖寺には御瀧場がある。

次に④の堂宇（七面堂）を建立するという点は、『荒木家系図』において神殿の建立が確認出来るため当てはまる。また⑤の七面大明神の尊像安置も確認できる。

⑥の参道は、参詣道があり、50丁ほどあるが、神殿を建立しているため参道となるような道はあったであろう。しかし小岱山は高山ではないため、50丁は当てはまらない。なお、現在は短い

ながら参道を設けている。

⑦の鳥居については参道や池畔に鳥居があると記述が見られなかったが、『荒木家系図』によると名称が七面神社とされていたためあった可能性は否定できない。

⑧の灯籠・丁石は、灯籠に関しては妙巖寺に残されている。

これらを踏まえていくと、妙巖寺になる前の八丁どんの七面大明神の社はほとんどうつし霊場の形式を取っていたといってもいいのではないだろうか。

さて、妙巖寺はなぜうつし霊場として成立でき、信仰を集めたのだろうか。それには、妙巖寺周辺が近世において宿場町であったことが挙げられる。前節で少し触れたが、近世の頃荒尾には高瀬（現熊本県玉名市）と三池（現福岡県大牟田市）を結ぶ大きな街道が二筋あった。（地図③参照）

一つは、金山から小岱山沿いに府本を通る三池往還（街道）、もう一つは、長洲を経由して有明海沿岸を北上する長洲・三池往還である。享保元（1716）年、妙巖寺のある樺村の隣にあたる府本町は細川藩から宿場町として許可され、三池往還を往来する人々で賑わったといわれ、幕府の巡検使などが休憩に利用したとされている。（写真20）



写真20 府本 宿町御免の碑

豪商荒木家の別邸は御茶屋として藩主の休憩所に利用された。この荒木家は藤助の所属する荒木家とは違う一族である。天保3（1832）年に建てられた御成門には細川家の九曜紋が残っている。

府本が宿場町として認可されたのが享保元(1716)

年、七面大明神が荒牧藤助によって勧請されたのが享保2（1717）年。これらのことを考えると、参勤交代や細川藩、島原藩など人々の往来が激しかったこの地区で、当時流行していたとされる七面山信仰の本尊、甲州七面山からそっくりそのまま勧請された小岱山の七面大明神の噂が広まらないはずはないと私は考える。小岱山の七面大明神は三池街道の存在、これにより大きく知名度をあげ、信仰を増やしたと考えられる。これが後に寺院として発足した後も遠方から参詣者があり、七面山という愛称が現在までも使われる由縁ではないだろうか。

おわりに

山梨県の七面山では、古来より山頂の池に対する信仰が成されていた。これは山岳信仰の形態を表しており、竜や蛇などの神様が宿していると信じられていた。七面山にはその後修験道の影響があり、近くの身延山に日蓮が入山したことにより、日蓮の死後から現在までに日蓮宗の信仰の対象となった。元々七面山にあった山岳信仰及び修験道の信仰を日蓮宗が習合する形で、七面大明神が誕生した。そのため、七面大明神は中世に信仰の証を見ることが出来ない新しい神様であった。

七面大明神は、初め身延山の鬼門を守る鎮守の神様であったが、しだいに日蓮宗の守護神としても語られるようになった。日蓮やすでに成立していた他の日蓮宗の守護神たちと結びつけられ、その御利益は江戸市域に宣伝された。宣伝方法は、絵画や御開帳、仏像の勧請など様々であったが、中にはうつし霊場という七面山本山の山容や様式をそっくりそのままうつした地方霊場も見られた。このように地方にうつされた霊場は、高山である七面山に参詣できない足の不自由な人々や遠方に住む人々など、その地方の熱心な信徒たちにとってとても重要なものであった。これらによって、七面山及び七面大明神の信仰は江戸中後期に流行することとなったのである。

筆者の実家である熊本県荒尾市の七面山妙巖寺という寺院は、享保2（1717）年に荒牧藤助という人物によって、七面大明神の尊像が小岱山という山の八丁どんどという所に勧請されたのがそも

そもの始まりである。妙巖寺として成立したのは明治27（1894）年であったが、その間にどのような形態で七面大明神の尊像を祀っていたのかわからない空白の177年があった。また、七面大明神の尊像を勧請した荒牧藤助については名前と残された墓しか資料がなかった。妙巖寺に残されていた資料からは、文化12（1815）年の時期には既に尊像は八丁どんどから現在の妙巖寺の場所にうつされ、天保14（1843）年には現在も妙巖寺に残っている石堂に奉安されていたと考察できた。また、荒木登志夫氏蔵の『荒木家系図』からは、七面大明神を勧請した荒牧藤助が荒木家六代荒木藤助村則であることが判明し、小岱山中に石垣づくりの社殿が建てられていたことがわかった。また、小岱山では戦前、山岳信仰によくみられる雨乞いの儀式が行われており、儀式に籠を用いていることから樺地域および小岱山に山岳信仰における竜神（水神）信仰があったことを示唆している。

熊本県における日蓮宗の信仰の伝播は、九州総導師として千葉県の中山法華経寺から派遣された久遠成院日親上人による県北部地域での布教活動と、熱心な日蓮宗信者であった肥後熊本藩初代藩主の加藤清正による影響を受けた県中部の信仰に分けられ、妙巖寺は前者の影響を大いに受けていると考えられる。この久遠成院日親上人によって開かれた妙法寺という寺院は、熊本県で最も古い日蓮宗寺院であり、妙巖寺のある荒尾市の隣、玉名市に属している。妙巖寺に残されていた資料から、妙巖寺が日蓮宗寺院となる以前にはすでにこの妙法寺と交流があったことがうかがえる。よってこの妙法寺の存在が妙巖寺成立に大きく影響していると考えられる。

『荒木家系図』によって、七面大明神勧請当時の社殿の様子が明らかとなったため、この社殿が七面山におけるうつし霊場の形式をとっていたのかを考察することができ、実際にほとんどその形式をとっていたこともわかった。小岱山山中の社殿がうつし霊場として成立でき、信仰を集めた理由には、妙巖寺周辺が近世において宿場町であったことが挙げられる。近世の頃荒尾には高瀬（現熊本県玉名市）と三池（現福岡県大牟田市）を結ぶ三池往還という大きな街道が二筋あった。享保元（1716）年、妙巖寺のある樺村の隣にあたる府本町

は細川藩から宿場町として許可され、三池往還を往来する人々で賑わった。七面大明神が荒牧藤助によって勧請されたのは享保2(1717)年のため、宿場町認可の翌年になる。参勤交代や細川藩、島原藩など人々の往来が激しかったこの地区で、当時流行していたとされる七面山信仰の本尊が甲州七面山からそっくりそのまま勧請されたとなれば、小岱山の七面大明神の噂は瞬間に広まったのではないかと考えられる。藤助が勧請した七面大明神像はこれにより大きく知名度をあげ、信仰を増やしたと考えられる。これが後に寺院として発足した後も遠方から参詣者があり、七面山という愛称が現在までも使われる由縁だと結論づける。

今回の論文の目的は、実家の七面山妙巖寺の成立を探ることにあつた。これまでは、荒尾市の資料においても詳しい考察がなされておらず、妙巖寺でもわからないことがほとんどであった。地域のお祭りや信仰が少しずつ失われつつある今、調べることが出来るのであれば今伝わっているものだけでも信仰の証を残したいと考え研究に取り組んだ。空襲や火災などで当時のことがわかる資料はほとんどなくなってしまっており研究は困難を極めたが、『荒木家系図』において妙巖寺も今まで把握していなかった事実が判明し、これは妙巖寺にとっても研究においてもより良いものであつた。

しかし、妙巖寺に至るまでの経緯がすべて明らかになつたわけではなく、もっと深い考察が必要な部分も数多くある。特に荒牧藤助がなぜ荒木家において一人だけ改名したのか、その真意は分からないままのためそこは気がかりである。

七面大明神が小さなお宮に勧請されてから妙巖寺に至った現在までの300年間信仰が守られてきたのは、地域の平和や安泰を心から願ひ大切に七面大明神にお参りしてきた四反田の人々があつてこそであり、それを見守る妙法寺があつてこそだということは紛れもない事実である。

また、寺院として発足したばかりの頃に妙巖寺を訪れた方の記録に、「殆どの信徒は御籠りをして、あの仙境のような環境で信仰を培養した」「山あり滝あり堂塔あり畑地あり、空気はよし水は澄めり」とあつた。明治27年頃までは、信仰するには十分な山容であり本山さながら御籠りをしていたのだ。

平和が当たり前となつた現代、交通網が発達し

簡単にどこへでも安全に行けてしまう現代、当時の人々の信仰心はいくら小さなお宮に勧請された神様であってもこのような現代とは比べ物にならないものだったのであろう。そしてそれがきちんと寺院に祀られることとなり、より信仰心が芽生えたのだろう。今このような信仰や伝統行事などは、衰退するか守られていくかの瀬戸際であると感じる。これらを継承しなければならぬという動きも出てきている。人々の信仰に対する考え方は、大分変わってしまったであろう。しかし、妙巖寺で育つたものとして、また研究を通して、このように小さな集落で300年間も大切に守られてきた七面大明神の尊像及び信仰を決して途絶えさせてはいけないと強く感じる。

妙巖寺についての資料は、私では力及ばず発見できていないものもないとは言ひ切れない。しかしながら、私の研究が荒尾市における日蓮宗の信仰の研究や、妙巖寺の信仰を守っていくために活用していただけるならば幸いである。

(注)

- (1) 中尾堯他『日本の聖域 第3巻 日蓮と身延・七面山 法華修業の霊場—身延・七面山』佼成出版社、1981年、p.113
- (2) 望月歆厚編『近代日本の法華仏教 法華経研究Ⅱ』平楽寺書店、1968年、p.185-190
- (3) 森宮義雄著『七面大明神のお話』七面大明神奉賛会発行、1972年、p.56-69
- (4) (2) 同上
- (5) 身延町誌編纂委員会『身延町誌』身延町役場、1970年、p.77
- (6) (2) 同上、p.190-194
- (7) (2) 同上、p.194-196
- (8) 高谷重夫『雨乞習俗の研究』法政大学出版局、1982年、p.188
- (9) (5) 同上
- (10) 望月真澄『身延山信仰の形成と伝播』岩田書院、2011年、p.41
- (11) 宮川了篤 林是晋監修『法華経信仰の霊場 七面山』かまくら出版、1983年、p.19-21
- (12) 『教誌 正法 第一三八号(お盆号)』日蓮宗新聞社、2014年

- 緒方啓介「法華の守護神像—法華の諸尊像を拝する」p.25-26
- (13) (10) 同上、p.42
- (14) 宮崎英修『日蓮宗の守護神—鬼子母神と大黒天—』平楽寺書店、1958年、p.123
- (15) (8) 同上
- (16) 小嶋博巳「地方巡礼と聖地」桜井徳太郎編『仏教民俗体系 三』名著出版、1987年、P.249-264
- (17) (10) 同上、P.237-260
- (18) (16) 同上
- (19) 池田暁子「聖地内巡礼—ミニチュア巡礼は「うつし」か—」『宗教民俗研究 八』、1998年、p.59-70
- (20) (10) 同上
- (21) 及川真介「七面山信仰伝播についての一案—新出の高岡大法寺所蔵絵曼荼羅を手がかりとして—」、『日蓮仏教研究 第三号』常円寺日蓮仏教研究所、2009年、p.161-170
- (22) 宮崎英修『昭和仏教全集第三部六 苦しみを乗り越える力』教育新潮社、1965年、p.69-70
- (23) 坂本勝成「江戸の七面信仰—高田の亮朝院を中心に—」『日蓮教學研究所紀要 第3号』立正大学日蓮教學研究所、1976年、p.1-28
- (24) 池上本門寺編『日蓮宗寺院大鑑』日蓮宗寺院大鑑編集委員会、1981年、p.988
- (25) 荒井繁『魅せられたる小岱の里』肥後日日新聞社発行、1971年、p.88
- (26) 麦田静雄『荒尾史話 第2巻』麦田静雄、1967年、p.28
- (27) 荒尾市教育委員会『荒尾市文化財調査報告 第6集 荒尾市の文化財 (I) 東部地区 (大字孤屋・野原・川登・金山・樺・府本・平山・上平山)』荒尾市教育委員会、1982年、p.113
- (28) (27) 同上、p.153
- (29) (27) 同上
- (30) 府本小学校PTA 調査広報委員会編『ふるさとマップ<再版>』府本小学校PTA 発行、1992年、p.99
- (31) 池上尊義「肥後本妙寺と清正公信仰の成立—近世庶民の法華信仰展開の一側面」
- 笠原一男博士還暦記念会編『日本宗教史論集下巻』吉川弘文館、1976年、p.159-183
- (32) 荒尾市史編纂委員会編『荒尾市史 環境・民俗編』荒尾市、2000年、p.549
- (33) 熊本県宗教連盟『熊本県宗教法人名簿』熊本県宗教連盟、1971年
- (34) 同上
- (参考文献・資料)**
- ・後藤是山『肥後國誌 (上)』九州日日新聞社印刷部、1916年
 - ・熊本県知事寺本広作『熊本県史 近代編第一』熊本県、1961年
 - ・京都本法寺六十二世 富田義将『師風道交』、1972年 ※京都本法寺六十二世 富田義将上人が親交のある寺院についての縁起やエピソードをまとめて親交のある寺院に配ったもの
 - ・森田誠一編『地方史研究叢書 肥後細川藩の研究』名著出版、1974年
 - ・「新・熊本の歴史」編集委員会『新・熊本の歴史 5 近世 (下)』熊本日日新聞社、1980年
 - ・宮崎英修監修『わかりやすい日蓮宗の御祈禱』かまくら出版、1982年
 - ・松本雅明監修『肥後讀史總覽』鶴屋百貨店、1983年
 - ・荒尾市『荒尾市史 前近代資料集』荒尾市史編集委員会、2009年
 - ・藤井日光『新訂 身延鑑』身延山久遠寺、2011年
 - ・国際日本文化研究センター 怪異・妖怪伝承データベース <http://www.nichibun.ac.jp/youkaidb/>
 - ・高橋俊隆「七面天女本地諸説」<http://www.myoukakuji.com/html/telling/benkyonoto/index235.htm>
- (図版出典)**
- ・写真 9-1、-2、13-1 は祖父撮影の写真を筆者が再度撮影したもの、他は全て筆者撮影
 - ・地図① 国土地理院 地理院地図 <http://maps.gsi.go.jp/> に筆者が加筆したもの
 - ・地図② 白地図テクノコ http://technocco.jp/n_

map/dl/0430/kumamoto2_cm.pdf

「この地図の作成に当たっては、国土
地理院長の承認を得て、同院発行の数
値地図25000（地図画像）を使用した。
（承認番号 平22業使、第632号）」に
筆者が加筆したもの

- ・地図③ 『昭文社エリアマップ 都市地図 熊本
県3 荒尾・玉名市 長洲・岱明町』本
図1:30,000 中心部詳細図1:12,000、1996
年 に筆者が加筆したもの
- ・<資料①> 荒木登志夫氏所有の『荒木家系図』
の書き下し分に筆者が加筆したもの
- ・付録① 荒尾市教育委員会『荒尾市文化財調査報
告 第6集 荒尾市の文化財（I）東
部地区（大字菰屋・野原・川登・金山・
樺・府本・平山・上平山）』荒尾市教育
委員の付録、荒尾市字界図の樺の部分
に筆者が加筆したもの。
- ・付録② 筆者作成の表

（聞き取り協力・研究協力）

七面山 第121代別当 望月浄教上人
京都府亀岡市 長栄山法華寺 第三十五世住職
杉若恵亮上人
福岡県大牟田市 荒木登志夫氏

熊本県玉名市 久成山妙法寺

